

氏名	つる だい さく 都 留 泰 作
学位(専攻分野)	博 士 (理 学)
学位記番号	理 博 第 2336 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	理 学 研 究 科 動 物 学 専 攻
学位論文題目	バカ・ピグミーの儀礼パフォーマンスに関する行動人類学的研究

論文調査委員 (主 査)
教授 田 中 二 郎 教授 山 岸 哲 助教授 山 極 寿 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中央アフリカに住む狩猟採集民バカ・ピグミーの儀礼パフォーマンスを行動人類学的に記述・分析したものである。

まず第1章では、本論文の位置づけが行われている。バカ・ピグミーは、アフリカを代表する狩猟採集民のひとつであるが、これまでは生態人類学的な研究が先行したため、宗教、芸術などの文化事象に関する詳細な研究は少なかった。彼らの儀礼は、複雑な象徴的表現を伴わず、簡素さと形式性の欠如を特徴とするが、それゆえ既存の宗教学や文化人類学における儀礼研究の方法論では研究が困難なものであった。そのような対象を記述・分析するには、儀礼パフォーマンスにおける徹底的な行動の観察と記載から出発する、行動人類学的方法が有効であることが指摘されている。

第2章でバカ社会の生業、言語、社会組織の記述がおこなわれた後、第3章で「べ」と呼ばれる儀礼パフォーマンスの社会文化的背景が述べられる。バカの「べ」は、「男性による踊り」と「女性による歌」という性的分業によって構成されているが、これには、超自然的な精霊に扮した踊り手が登場するもの(精霊パフォーマンス)、農耕民由来と思われる邪術信仰とかかわりの深いもの(治療パフォーマンス)、精霊を伴わず娯楽の要素が強いもの(円舞パフォーマンス)などのいくつかの種類があることが示される。

第4章では、とくに精霊パフォーマンスにおける歌と踊りの相互作用が詳細かつ定量的に記述・分析される。パフォーマンスにおいて観察されたさまざまな行動とその時間的継起の分析から、精霊パフォーマンスは、合唱の休止によって区切られる「セッション」の連続として記述できること、セッションが高揚してくると踊りが始まること、森のなかから登場する踊り手(精霊)が歌い手に対して接近・離脱・回転・停止・共演などさまざまなパフォーマンスをおこなって場を盛り上げること、そして合唱と踊りの展開にはきわめて強い相関があることなど指摘し、精霊パフォーマンスが、終局部における集団的なクライマックスに向けた、歌と踊りの相乗的インタラクションによって進行することを示した。

第5章では、精霊を伴うパフォーマンスの展開形式が、精霊を伴わないパフォーマンスのそれと比較される。前者ではパフォーマンス終局部のクライマックスに向けて、歌と踊りが相乗的に高揚してゆくが、後者ではそのような高揚はみられず、人々の興奮の程度も定常的なままに留まることを示している。また、これらを他のピグミー系集団や農耕民の儀礼パフォーマンスと比較して、後者のカテゴリーに属する円舞パフォーマンスがピグミー系集団が本来持っていた歌と踊りの形式であり、バカは、近年の農耕化・定住化に伴って農耕民由来の仮面儀礼の要素を取り入れた精霊パフォーマンスをおこなうようになったと推定している。そのうえで、バカの精霊パフォーマンスは、パフォーマンスの儀式化・定型化に向かおうとするベクトルと、彼らに固有な無定型化のベクトルの微妙な均衡点の上に成り立つものだと指摘している。

最後の6章ではまず、このようなバカの儀礼パフォーマンスの特徴が、人類以外の霊長類の音声的・身体的な同調行動との比較において考察されている。ボノボ(ピグミーチンパンジー)の性器こすりやテナガザルのデュエットなどに見られる同調的なコミュニケーション行動には、「楽しさ」や「快感」といった自己目的のプロセスの萌芽が見られるが、狩猟採

集民においても、こういった情緒的・身体的な親和力に足場をおいた社会的コミュニケーションが重要であり、そうした相互行為が彼らの可塑的・流動的な集団編成の基盤となっていることを指摘している。

論文審査の結果の要旨

人類のもっとも原初的な姿を残していると考えられる狩猟採集民社会に関しては、これまでに多くの研究が蓄積されてきた。しかしその大半は、霊長類から人類への進化史の再構成というモチベーションに彩られた生態学的、社会構造論的なアプローチであり、申請論文が扱っているような宗教・儀礼・コミュニケーションといった領域の研究は、従来の狩猟採集民研究における欠落部分であった。狩猟採集民社会の儀礼は、「形式化に抗する」というのがその本来の特徴であり、儀礼形式の記述から出発するこれまでの文化人類学の方法論を適用することが困難である。申請論文において成し遂げられたのは、このように従来のパラダイムではアプローチが難しい狩猟採集社会の儀礼という対象に、徹底した行動学的な観察とそれに基づくきめ細かな記述と定量的な分析によって切り込むという作業である。

申請論文が対象とするのは、中央アフリカに住むピグミー系狩猟採集民バカの儀礼パフォーマンスである。申請者はすでに、長期のフィールド調査に基づいてバカの社会で行われている儀礼パフォーマンスの種類や、その創始と伝播の過程、そこに現われる精霊のキャラクターなどに関する記載と分析をおこなっているが、申請論文ではこれらの研究を背景に、実際のパフォーマンスにおいて生起する相互行為が綿密な観察に基づいて分析されている。バカのパフォーマンスは、「男性による踊り」と「女性による歌」という二つのパートからなり、両者の「かけあい」的相互作用によって展開する。申請論文で分析の中心となっているのは、この相互作用を通してパフォーマンスがクライマックスへと進められてゆくプロセスである。森から登場する精霊に扮した踊り手が、場の雰囲気や緊張感を敏感に察知しつつ、表情豊かな行動によって人々の注意を引きつける。また、歌手の女性たちは合唱を積み重ねることによって踊りを活性化させる。このような過程が、多数のパフォーマンスの事例から集めた膨大な量の統計的データの分析から明瞭に描写されている。

パフォーマンスの参加者には、ともに場を盛り上げクライマックスへと到達しようというゆるやかな方向づけは共有されているものの、そこでなされるべき「ルール」や「式次第」のようなものが共有されているわけではない。バカのパフォーマンスは、いわば自己生成的な相互作用にしたがって展開するシステムである。そのようなシステムはいっけん脆弱であるように見えるが、しかし申請者は、バカ社会においてはむしろ定式化した形式こそがパフォーマンスの「楽しみ」を阻害するものであり、形式的に抗することが参加者の高揚とつながりの感覚の強化につながっているのだと結論している。このような視点は、「構造の記述」をもって足れりとする従来の文化人類学的な社会構造論に対する鋭いアンチテーゼであると評価できる。

さらに、申請者のおこなった行動学的分析は、人間の儀礼行動を人間以外の高等動物の行動と比較する基盤を提供する。ボノボの性器こすり行動やテナガザルのデュエットに見るように、高等霊長類においては「遊戯」とか「楽しみ」などの用語を使ってしか記述し得ないような、自己目的的な行動の萌芽を観察することができる。その延長上にバカのパフォーマンスにみられるようなインタラクションを位置づけようとする申請者の試みには十分な説得力がある。

以上述べてきたように申請者は、長期のフィールドワークにもとづく質的・量的に十分な実証的データにもとづいて、これまで理系的な分析にはなじまないとされていた狩猟採集民の儀礼という対象に対して、独創的なアプローチを展開している。申請論文において得られた知見は今後の人類学的研究において新たな領域を開くものと思われる。

よって、本研究は博士（理学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成12年12月26日、主論文に報告されている研究業績を中心として、これに関連した分野について試問した結果、合格と認めた。